



新たに農業改良普及センターを併設

農業技術の開発・発信基地としての再スタート

21世紀のキーワードは「食料」「環境」「人」といわれている。このうち、食料問題については、昨年6月に国連が発表した「2000年版食料白書」が、飢餓人口はなお8億人を数え、食料不足国の数は43か国に増えたと報告している。

一方、ネギ、生シイタケ、イグサ（畳表）のセーフガード暫定措置の発動問題に見られるように、中国や韓国を始めとする海外からの農産物の輸出攻勢により、国内産地の弱体化が懸念され、本県においてもその例外ではない。

このような農業をとりまく環境の中で、本県農林水産部は今後の10年目標として、平成12年3月に「広島県新農林水産業・農山漁村活性化行動計画」を策定し、「産業として自立できる農林水産業の確立」「農山漁村における快適な生活空間の創出」「農林地及び水域の公益的機能の維持発揮」を柱とする施策を展開している。

この理念に基づき、農林水産業の試験研究に係る

施策の重点的・効果的な推進を図るため、昨年12月に「広島県農林水産関係試験研究推進構想」を策定した。これには農林水産試験研究の重点化方向やその効率的推進方策、研究成果の効率的活用と県民への理解の増進まで、幅広く、具体的にうたっている。

今後の試験研究は、この推進構想に基づいて推進していくことになるが、研究対象は、生産振興のみでなく、公益的機能を活用した分野などへの役割も今まで以上に大きいものとする。

本年4月より、広島県農業改良普及センターが同じ建物内に開所した。これを機会に、普及機関との連携を一層深め、農業技術の開発、発信基地として、農業・農村の活性化に積極的に貢献していきたいと考えている。どうか、当センターへの御来所と現場からの忌憚のない御意見、御要望を賜りたい。

所長 後 俊孝

デルフィニウム・シネンシス 2 番花の 3 月開花技術

本種は最近、切り花用に栽培が急増していますが、県内の大型花き生産者の圃場で、1番花を11月に収穫した後に、暖房しているにもかかわらず次の2番花が開花しないという深刻な問題が発生しました。

そこで、1番花が開花した後に2番花が咲かないのはロゼット化によるものと判断し、この問題解決のため、ロゼット打破の試験に取り組みました。その結果、1番花の収穫後ただちに温室の暖房を停止するとともに室内を開放して、冬の寒さに30~40日間遭わせたところ、写真のように、よく開花するようになりました。

このとき、1株当たり4~5本開花する2番花は、高価格が期待できる需要期の3月中旬に揃って出荷できますので、所得が大幅に増加します。さらに、3番花はロゼット化することなく5月中旬に開花します。
(園芸研究部)



写真1 開花しない現地の状態



写真2 低温処理後の開花状況

薬剤を利用した温州ミカンの全摘果により隔年結果を逆転

近年、温州ミカンは隔年結果がますます激しくなっています。高品質ミカンを安定的に生産するためには、豊作年に一定面積の遊休樹を設けて、全摘果を行うとともに、不作年の収量を確保することが重要です。

そこで、重労働となる遊休樹の全摘果作業への薬剤の利用を検討したところ、作業が大幅に省力化されるとともに、翌年の果実生産に薬剤が悪影響をおよぼさないことが明らかになりました。

- ①早生温州の着果過多樹を遊休樹として選び、満開後20日目頃にフィガロン1,000倍にエスレル2,000倍を加えた薬剤を、10a当たり400g散布すると、ほぼ100%落果します。
- ②手作業による残果の摘果時間は、樹当たり約2分と、ごく短時間で済みます。
- ③翌年の着花は極めて多く、収量は樹当たり100kg以上確保でき、品質への悪影響もありません。



フィガロン+エスレル散布により全摘果した樹の翌年の結果状況

(常緑果樹研究室)

トマトの一斉つる下ろしによる誘引作業の省力化

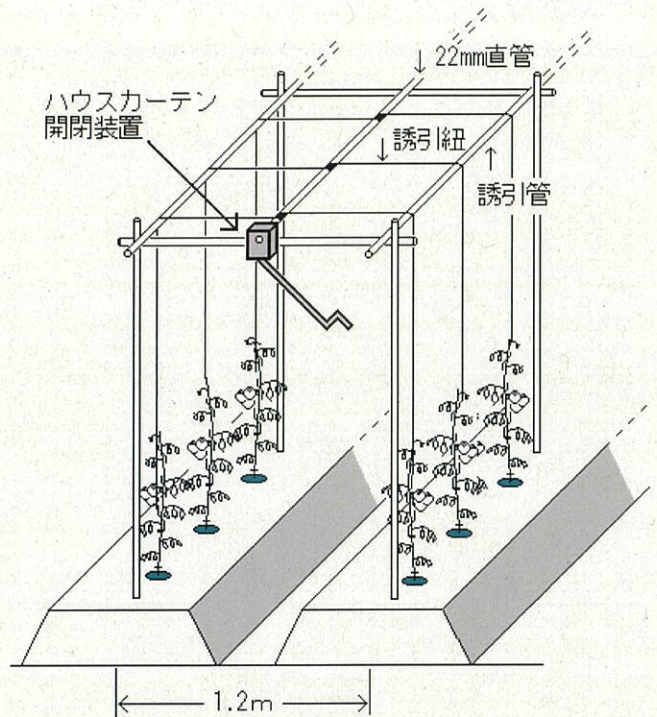
トマトにおいて一般的に行われている多段どり栽培では、茎長が長くなるため誘引作業が重労働となっています。そこで簡易で省力的な誘引方法を目指して、ハウスカーテン開閉装置（商品名：くるっこM）を利用した一斉つる下ろし法を考案しました。

この方法は、次のように行います。

- ①くるっこMと22mmの直管をつなぎ、振れ止め金具を利用してハウスの梁に固定します。
- ②あらかじめ必要な長さの紐を、ずれないようにしっかりと直管に巻き付けておきます。
- ③生長点が誘引管に届いたら、ハンドルを回すことで紐をゆるめてつる下ろしを行います。

誘引作業時間は慣行のつる下ろし作業の半分以下となり、作業強度も軽減されました。この装置を使用すると18m×2畦（80株）までは一斉に下ろすことが可能でしたが、畦の長さがこれ以上になる場合は検討が必要です。

（旧高冷地研究部）



一斉つるおろし装置

大豆有望系統「九州131号」の特性

水田の生産調整面積の増大に伴い、麦・大豆等の土地利用型作物の本格的な生産が推進されています。広島県における大豆の作付は、既存の奨励品種「アキシロメ」がほとんどで、作物研究部では、これを越える品質、収量及び栽培適性を持つ品種の選定を行ってきました。そのなかで、九州農業試験場で育成された「九州131号」を有望視しています。

「九州131号」は「アキシロメ」に比べ、開花期・成熟期はほぼ同時期で、大粒で収量が20～30%程度多く、外観品質は同程度です。また、子実中の蛋白質含有率が高く、豆腐加工適性が高いと考えられています。平成12年度に県内4箇所（東広島市高屋町、御調郡久井町、双三郡三和町、深安郡神辺町）で行った現地試験においても、良好な結果を得ることができました。

平成13年度末の奨励品種採用に向けて、県立食品工業技術センターの協力のもとに、豆腐製造メーカ

ーによる加工適性評価を行う予定です。

（作物研究部）



写真 「九州131号」生育期の状況

ひろしまの在来作物(22) — みずみずしい大きな葉で耐病性のある「矢賀ちしゃ」2種 —

先日、広島市農林業振興センターのNさんから「矢賀ちしゃ」の種はありませんかという電話を頂いた。早速検索すると赤系と青系の2系統があることがわかったが、発芽率が極端に低い。特に赤系ではコンマ以下である。Nさんには種に分譲時にそのことを伝えたが、とにかく早急に増殖しなければならないと思い、赤系では短期貯蔵の約半量、青系では百粒程度を用いてインキュベーター内で発芽を試みた。幸い両系統共に5粒程度発芽したのでガラス室内のポットに植え、現在栽培中であるが、これが共に優れものである。

葉の形は共に扇型で大きく、葉色は薄い黄緑の地に赤系は鮮紅色、青系はくすんだ褐色を共に刷ったようで美しい。肉質は極めて柔らかく、生食での食感が良い。高温下で栽培してもチップバーンの発生が極めて少なく、バクテリアによる株枯れの発生も今のところ見られない。先人の残した優れた遺伝子を絶やさず保存できそうでホッとしている。

(ジーンバンク技術主幹：船越 建明)

(財)広島県農業ジーンバンクが収集した貴重な県内遺伝資源(種子)をシリーズで紹介します

◆刊行物案内

- 第33回農業技術センター研究成果発表会要旨集(3月)

◆農業技術センター 4~6月見どころ案内

- 作物研究部：湛水直播き水稻の出芽と生育、地被植物の生育開花、パン用小麦の出穂~成熟期の状況。
- 園芸研究部：アスパラガスの乗用収穫作業車(5~6月)、楽な姿勢で収穫イチゴベンチ栽培、バラの新整枝法等。
- 生物工学研究所：アスパラガス育成品種「グリーンフレッチェ」の萌芽状況、薬培養で育てた水稻育成系統が温室内で収穫期を迎えております。

※この他、視察、見学等は常時、全所で受け付けています。どうぞ見学においでください。

◆組織改革のお知らせ

高冷地研究部及び島しょ部研究部を廃止し本所へ統合した。

◆人事異動のお知らせ

【転入・新任】

所長：後俊孝、次長：景山尚文、総括研究員：古土井悠、主任専門技術員：谷本俊明、青山幹男、総務課長：新原武士、主任主事：古本みゆき、谷口理絵、主事：花山幸之、専任技術員：今村栄子、技術員：井上敏信、研究員：越智資泰、伊藤栄治、延安弘行、藤原朋子、環境研究部長：酒井泰文、主任研究員：松浦謙吉、生物工学研究所長：細田昭男、細胞工学研究室長：古谷博、育種研究室長：勝谷範敏、研究員：中津弥弥香、主任専門技術員：今井俊治、山崎隆生、果樹研究次長：那波邦彦、管理課長：立川武司、主任主事：伊藤智之、常緑果樹研究室長：長谷川繁樹、副主任研究員：川崎陽一郎、研究員：西川祐司、柑橘研究室長：中谷宗一

【新規採用】

研究員：北野剛志

【転出】

橋爪直昭、大木健一、三善正道、天野かおり、岡田恵壮、加納徹治、湯浅哲信

【退職】

森島正幸(所長)、小池智枝(主任専門員)、横井政美(主任専門員)、渡辺君代(専任技術員)、杉原紘司(専任技術員)、村上淳(技術員)、土居嘉明(生物工学研究所長)

発行 広島県立農業技術センター

(企画情報部)

〒739-0151 東広島市八本松町原6869

TEL (0824) 29-0521 FAX 29-0551

ホームページ <http://www.arc.pref.hiroshima.jp/>

編集後記

自然の女神のベールは、剥がしたと思ってもまた現れてくる(白川名誉教授)。技術革新への挑戦は限りなく、立ち止まれば直ぐに追い越される。

組織と所在地

農業技術センター	本所	(総務部、専門技術員室、企画情報部、作物研究部、園芸研究部、環境研究部、生物工学研究所細胞工学研究室、同育種研究室)
"	果樹研究所	〒729-2402 豊田郡安芸津町三津2835 TEL (0846) 45-1225 FAX45-1227 (管理課、常緑果樹研究室、落葉果樹研究室)
"	" 柑橘研究室	〒729-0321 三原市木原町463 TEL (0848) 68-0131 FAX68-0181